

文化財センター通信

【かざぐるま】

風 車

第 40 号



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

【第3回】

紀三井寺 文化財建造物の 保存修理

塗装調査からわかったこと - 2

平成十八年十一月より紀三井寺（護国院）では、重要文化財である多宝塔、鐘楼、楼門の三棟の保存修理工事が行われてきました。修理工事は、塗装と屋根修理が主な内容でしたが、平成二十年二月初旬には無事に工事が完了し、今は塗り直された美しい姿を見ることが出来ます。

今回の修理にあたり塗装調査をした結果、三棟の塗装が昭和修理で変更されていることがわかり、当誌37号で報告したところです。続いて本稿では、なぜ塗装が変更されたのか、その理由を探ってみたいと思います。

昭和修理の塗装変更の理由

塗装の変更を大観すれば、三棟共に、修理前は弁柄基調で、胡粉をほとんど用いず、全体に赤く塗装するものでした。境内の建物では、未指定文化財の開山堂が今もその仕様で残されています。これが昭和修理のさい、丹塗、胡粉塗で塗り分ける、つまり橙色と白色の現状の配色に変更されたのです。

多宝塔の昭和二六年の修理工事報告書を見る限り、なぜそうしたのかはうかがうことができません。しかし報告書に記載がないので、文部省の正式な現状変更手続を経っていないことはわかります。文化財の保存修理は現状修理が基本となります。復原するなどして、現状を変更するには、文化庁の現状変更許可が必要となります。文化財に指定されると改造できなくなる、といった話はここから来ています。塗り分けを変えることは、現状変更の許可が必要ですが、そうでなかったのはどうしたのでしょうか。

こういった昭和修理当時の状況を、察することの出来る興味深い記述が、多宝塔修理工事報告書にはあります。



楼門修理前 白い胡粉塗りの下に元の赤い弁柄が見える

「外部は大半を弁柄、台輪、長押、縁束、扉框等を黒塗とし、胡粉塗の箇所は一箇所もなかった。弁柄の色が冴えない色である上汚れて黒ずみ、なお

— 第 40 号の主な内容 —

1. 紀三井寺 文化財建造物の保存修理
第3回 塗装調査からわかったこと - 2
2. 新現場紹介
3. 旧中筋家住宅現場短信

◎重要文化財金剛三昧院保存修理工事事務所◎
648-0211 高野町高野山425金剛三昧院内上蔵院気付
tel./fax. 0736-56-5578

◎重要文化財旧中筋家住宅保存修理工事事務所◎
649-6324 和歌山市栴直148番地
tel./fax. 073-477-5969

黒塗の箇所が割合多くて悪趣味と云えるような配色であった。また胡粉塗の部分がないのがひきたない原因でもあったが、この地方の特色として一部黒塗の部分を除いて全部を丹塗とするものようである。当初の塗は古材の見え隠れ部等に点々と残っていたが、弁柄塗でなく丹塗で、絵様の眉の塗は黒塗であったように思われ、胡粉塗の古材は一本も発見されなかった。内部は四天柱上部、内陣内法長押を極彩色、側内法長押、天井格縁を黒（ただし面は朱）、天井板は赤、内法長押より下を木地のままとしていた。極彩色の部分はあるいは当初の塗と思われたが、他は外部の塗と同様後補のものと思われ俗悪なものであった。」

『重要文化財護国院多宝塔修理工事報告書』昭和二六年)

この報告書の文章は、当時の修理工事を担当した修理技術者によって書かれたものですが、ここでは修理前の塗装が、全く評価されていないのがわかります。察するに、「悪趣味」で「ひきたない」塗装であったので、文化財として一般的、かつ美しいと考えら

れた塗装、つまりは丹塗基調に裏板や壁板を胡粉塗とするものに、正式な許可手続きを経ずに変更されたようなのです。それが現場の技術者レベルで判断されたのか、文部省の技官とも協議の上であったのかどうかは定かではありません。ともあれこのことは、この当時は建築塗装の価値というものじたいに、ほとんど重きが置かれていなかったことの証拠であると思われるます。

昭和修理前の塗装は、近代文化財保存修理の手が加わる前の塗装でした。技術者の目に美しいと思えなかった塗



開山堂の軒見上げ
文化財未指定の開山堂（江戸前期）には、指定3棟が昭和修理で失った軒裏を一面に弁柄で塗る仕様が、今も残されている。

装は、実は当寺が長い歴史の積み重ねを反映しつつ、そのなかで選択し、塗装したものであることには間違いのないものでした。報告書文中にある「この地方の特色」とされたものがまさにそれです。三棟は文化財としての保存修理において、修理関係者によって文化財としてふさわしいと考えた塗装に変更されたようですが、結果として建築塗装の地方性や時代的特徴を失うことになったのです。境内の未指定文化財の開山堂に、重要文化財指定三棟の旧塗装仕様が残されている事は、近代文化財修理が与えた塗装の保存への影響力について、改めて考えさせられます。文化財修理の理念も、時代によって違

修理の竣工

前述のように今年2月初旬に三棟の修理工事は完了しまし

た。多宝塔は屋根の野地面に白蟻が入っていて、予想以上の大修理となりましたが、その他はおおむね予定通り進みました。三棟は塗り直されて優美な姿を見せています。桜で有名な紀三井寺は、まもなく花見の時期を迎えます。また境内の南側に建立された新仏殿に安置される、国内最大の千手十一面観世音菩薩像の入仏落慶法要も予定されていると聞きます。紀三井寺は今年も多くの人で賑わいそうです。当誌の紀三井寺修理の連載は、これでひとまず最終といたしますが、ぜひ読者の皆さんもこの機会に紀三井寺を訪ねてみてはいかがでしょうか。

（御船達雄）



竣工なった多宝塔

新 現場紹介

文化財センターで設計監理を受託した、新たな2件の文化財建造物修理現場を紹介します

【金剛三昧院客殿及び台所ほか】

和歌山県文化財センター・文化財建造物課では、平成二十年一月より新たな事業が開始されました。現場は高野山にある金剛三昧院です。この事業では、重要文化財の客殿及び台所と、国宝の多宝塔を五年間で修理します。



重要文化財金剛三昧院客殿及び台所(右側の建物)

客殿及び台所は桁行一八・二m、梁間一七mの客殿と桁行二四・二m、梁間九・九mの台所を、中庭を介して繋ぎ、その正面に玄関を付加した、大規模な建物です。建てられた時期ははっきりとわかっていないのですが、建物の様式などから江戸時代初期のものだと考えられています。高野山ではこのような形式の建物が数多く見られますが、金剛三昧院の客殿及び台所はその中で最も古い建物です。

多宝塔は、正方形の一階部分に円形の二階を重ね、四角い屋根を乗せた形式の二重の塔です。貞応二年(一一二二)に鎌倉幕府三代将軍源実朝公を弔うために建てられたもので、多宝塔としては石山寺多宝塔(建久五年・一一九四)に次いで全国で二番目に古く、また和歌山県内の建築物の中では最も古い建物です。

今回の修理では、客殿及び台所は屋根の葺替えと、傾いた建物の建て起こしを行い、また重要文化財に指定されている襖絵や障壁画の修理も行います。多宝塔は屋根の葺替えを行います。客殿及び台所と多宝塔の屋根は、共に

椋皮葺ひわだぶきと呼ばれる椋の皮を重ねて葺かれたものです。この屋根は薄い椋皮を何枚も重ねて葺くため、優美で柔らかな印象の屋根を作り出すことが出来る反面、瓦屋根等に比べると耐用年数が短く、三十年ほどの周期で屋根を葺き替えなければなりません。

客殿及び台所・多宝塔は、共に和歌山県下のみならず、全国的に見ても大変貴重な文化遺産です。今回の修理では、その価値を損なうことなく、また新たな価値を見だし、後世に伝えていくという重要な責務を担っていると考えると、身の引き締まる思いがします



冬季は雪が降り積もります(今年の2月に上写真と同位置から)



雪が積もった多宝塔の外観

す。機会を見て、皆様に工事の経過を報告させて頂きたいと考えておりますが、皆様も実際に高野山へ足を運び、金剛三昧院を含め、高野山が蓄積してきた雄大な歴史・文化を体感してみたいかがでしょうか。(結城啓司)

【天満神社本殿ほか1棟】

平成二十年二月より、和歌山市和歌浦の天満神社において、重要文化財に指定されている本殿の椋皮葺屋根の葺き替え工事が始まりました。

現在の天満神社本殿は、慶長十一年(一六〇六)に時の藩主浅野幸長によって建立されたものです。また建立棟札には「大工堀内吉政」の名が記され、近世を代表する木割書「匠明」を著した江戸期大工技術の二大流派の一つ、平内家の吉政・正信親子の実作とし



天満神社本殿を正面から見る



天満神社本殿向拝の木鼻彫刻

て知られます。

躍動感あふれる彫刻が数多く施され、桃山時代の華麗な建築様式を代表する本殿には、千鳥破風が設けられた優美な桧皮葺屋根が載っています。桧の皮を積み重ね、竹釘で押さえる桧皮葺屋根は、およそ三十年前後で葺き替える必要があります。天満神社本殿も昭和五年の修理から三十年以上が経過し、海風が吹き上げる厳しい環境でもあることから桧皮の破損が進み、葺き替えの必要が生じていました。

今回の修理では、平成二十年十二月まで十一ヶ月をかけて、本殿の屋根の

全面葺き替えをおこなうほか、地盤沈下で傾いた重要文化財末社多賀神社本殿の不陸調整工事などを実施します。

(多井忠嗣)

【旧中筋家住宅現場短信】

修理工事期間が残り二年となった重要文化財旧中筋家住宅では、現在は表門の屋根廻り、土塀、御成門の工事を進めています。

表門は、二月初めに屋根が葺きあがり、現在は棟に漆喰を巻く作業を行なっています。漆喰の白色が映え、十六間ほど続く、棟積み瓦の並びが引

き縮まって見えます。

土塀は、まずは東半分の施工を進めており、屋根が二月半ばに葺きあがりしました。現在は左官仕事を主に行なっています。土を塗り付けた後は、その材料が乾くまでの間隔を置く時間が必要で、手間のかかる作業です。

御成門も二月初めに瓦が葺きあがり、素屋根を解体しました。柱の修理なども終わり、作業は終盤です。現在は柵の取り付けを行なっています。

また他に主屋土間の流し台や棚の造作も平行して進めています。先日、試験的に竈に火をおこしました。土間全体に薪が燃える匂いが広がり、煙出しの小屋根から煙が出てくるのを眺めると、ここがかつての生活の中心の場であつた姿を想像できました。

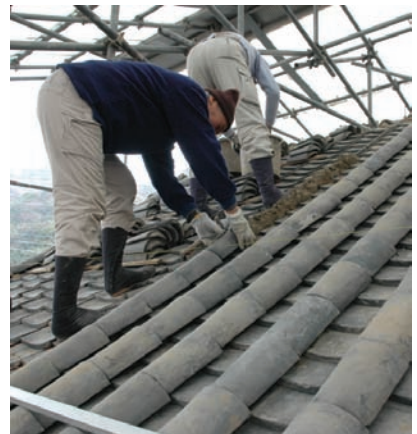
現場の工事は着々と進んでいます。表門の屋根廻りの工事が終われば、いよいよ表門を囲んでいる素屋根の解体が始まります。少しずつ大庄屋としての中筋家屋敷構えを目で確かめることが出来るようになってきました。通りからもその様子が伺えるのではないでしょうが。

(大嶋奈美)

▼ 主屋のカマド



▼ 表門の屋根葺き



風車 第40号

平成20年3月10日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山市湊571-1
tel.073-433-3843
fax.073-425-4595
e-mail maizou-1@wabunse.or.jp
<http://www.wabunse.or.jp>